

45年間の教職生活

宮井 和 恵*

Kazue Miyai

1. はじめに

45年間の教職生活（小学校現場で38年間、日本女子大学で7年間）は、子ども達や学生に元気をもらいながら好きな事をやり通せた幸せな日々でした。

大学時代に幼、小、中、高の教員免許を取得しましたが、小学校教員になりたいという気持ちが強く、念願通りの道を歩んできました。初任の頃の私は、生意気にも「これからの日本人には、どんな力が必要か」ということを真剣に考えている教師でした。そして、「国際社会で生きる日本人には『表現力』を高めていく必要がある」というのがその当時の私の中での結論でした。まずは自分にできることを実行しようと考え、様々な授業の中で、表現活動の有用性を説き、その活動を充実させてきたことを今でもよく覚えています。つたない実践の積み重ねではありましたが、「目の前の子ども達の役に立てる教師になりたい」と願いつつ、毎年自分なりに工夫を重ねて教育活動を楽しんできたように思います。教育現場で誠心誠意、子ども達や学生の為に力を注いできた教職生活は、それなりに充実したものでした。

私の研究は、理論を構築する研究というより、実の場で子ども達や学生の力を高めることを追い求めてきた実践的研究でした。

2. 国語科の授業研究

「子どもが意欲的に学ぶ授業づくりをしたい」という熱い思いをもち、日々の授業研究に奮闘してい

たある日、先輩の授業を見せていただき衝撃を覚えました。それは、子ども達が主体的に自由発言をしながらも考えを深め合っている国語科の授業でした。自分もこんな授業をしたいと思えばさっそく授業スタイルを真似ました。授業の型は割と早い段階で出来上がりましたが、問題は、中身です。私の中で、国語科の研究を深めたいという気持ちが頭をもたげてきました。

私は子どもの頃、国語の授業に魅力を感じませんでした。少し異なる自分の考えをもちながらも先生の考えに添う回答をしなければならないのが授業の苦痛な点でした。このような回顧される体験も、私の中で「学びの主体は子どもである」という認識を高め、確かな力を付ける国語科授業研究に拍車を掛けたと言えます。

◇個の研究からチームの研究へ

国語科の研究を始めた当初は、全国の様々な研究会に足を運び、自分なりに授業研究を続けていました。2校目に異動後、校長からの誘いを受けて、川崎市立小学校図書館研究会常任委員としての研究活動が始まりました。「図書資料をいかに有効に授業の中に取り入れていくか」という研究でしたが、その後の川崎市立小学校国語教育研究会での研究にも繋がりました。チームでの研究は、深夜にまで及ぶこともあり、時間を忘れて授業研究に没頭する毎日でした。

◇学級の子も達から学校全体の子も達や川崎市の子も達へ

2003 年度から川崎市立三田小学校で川崎市教育委員会研究推進校〔国語科〕研究主任を務め、「心豊かに関わり合い、伝え合う力の育成」という自校の子も達のための研究を、足かけ 4 年（2003－06）に渡って進めてきました。同じ時期に、川崎市立小学校国語教育研究会の研究部長もしており、川崎市全体の子も達のために、「確かな言葉の力を育てる国語教室」～さまざまな書く活動を通して、豊かな書き手を育てる～という研究を立ち上げました。同時に 2 つの研究を進めなくてはならない立場になり、研究に勇往邁進の日々を過ごしていました。

その後、川崎市立小学校国語教育研究会会長や神奈川県小学校教育研究会国語部会長を拝命し、色々な場で国語科の授業について、講演をする機会に恵まれました。

また、多くの学校で行われている国語科の研究に講師として関わらせていただきました。川崎市教育委員会研究推進校（国語科）を引き受けていただいたいいくつかの学校の講師としても、それぞれ 2 年間ずつ継続した指導・助言をさせていただきました。川崎市立犬蔵小学校（2009－10）、川崎市立百合丘小学校（2016－17）、川崎市立日吉小学校（2019－20）。どの研究推進校の研究も素晴らしい成果を挙げることができました。

2013～2014 年度には、川崎市立宮前平小学校の校長の立場で、川崎市教育委員会研究推進校〔国語科〕・文部科学省国語科学習指導協力校としての研究を行いました。「届けよう 受け止めよう ことばと心」という研究主題を掲げ、一人一人の考えの良さが生きる授業づくりについての研究成果を発表しました。

3. 日本女子大学に赴任

2016 年 4 月、日本女子大学特任教授として着任しました。これまで自分が積み上げてきた国語科授業研究のことや様々な教職体験を礎としながら、今度は教職を目指す学生のために力を尽くしたいという思いで一杯でした。西生田キャンパスに 5 年間、目白キャンパスに 2 年間、勤務しました。

西生田キャンパス時代は、四季折々の花や木々に

囲まれ、キャンパスまでの坂道にも楽しみを見つけないがら通勤しました。教職支援室には毎日のように学生が来室し、いつもにぎわっていました。目白キャンパス移転後は、教職支援室はなくなりましたが、教職教育開発センターでの相談業務が始まりました。キャンパス統合に伴って、教職関係の様々なことが少しずつ変わり、戸惑いながらも先生方と協力しながら前に進んできました。

この 7 年間、毎年夏には教員採用試験に向けての指導を続けてきました。「共にこの夏を乗り切ろう」と学生を叱咤激励しながら、私自身も全員合格させたいという強い思いをもって、指導に熱が入りました。論作文や個人面談・集団討論・模擬授業等、何度も何度も指導しながら、暑い夏を学生と共に過ごしてきたのも良い思い出です。

日本女子大学在職中、一番力を注いだのは、やはり授業づくりでした。私は、教職全般に関する授業と国語科教育に関する授業を受け持ちました。

1 年次の「教職基礎論」では、授業の回を重ねるごとに学生の目線が、高校卒業したての学生目線から教師目線に変わる手ごたえを感じることができました。「学級経営論」は、1 年次から 4 年次までの学生が受講しているので、それぞれの学年にとって有意義な学びとなるよう授業の流し方や教材を工夫してきました。異学年でのディスカッションから生まれる学びは、刺激的で新たな視点を生むことが、提出されるレポートから読み取れました。4 年次後期の「教職実践演習」の授業では、学生の実態把握から授業を組み立てていき、「教育される客体」ではなく、「自律的に学ぶ主体」を目指しました。どの学生も意欲的で、4 年間の成長ぶりが見受けられる学び合いが展開されました。

「国語科概論」「初等国語科教育法」の授業は、これまで私が実践的に研究してきたことや学習指導要領の変遷を考慮しながら授業づくりを行ってきました。教材は毎年少しずつ改訂し、学生の実態やその時の学習指導要領に沿った有効な資料が提示できるように努めてきました。「初等国語科教育法」の授業では、指導案作りに力を入れ、国語科は能力教科であるという認識を高めながら、指導事項をしっかりと意識した授業構成員の育成を強く願って進めてきました。それらの実践の一端を、教職教育開発センター年報（第 3 号）の論文「生きて働く言葉の力

を育む国語科教育～国語科における、言語活動を通じた言語能力育成の授業づくりとその教え～」にまとめました。

「学校インターンシップⅠ・Ⅱ」や教育実習事前事後指導等では、それぞれの担当の助手さんと連携しながら、学生の教育現場での学びが充実したものになるように努めて参りました。

4. 海外日本人学校・日本語学校視察訪問

国語科の研究を続けるうちに、言葉への意欲についても考えるようになりました。そして次第に、海外で暮らす日本人はどのような学びをしているのであろうかと、未知の世界への興味が高まり、大学在職中にいくつかの日本人学校や海外の日本語学校を視察させていただきました。

【2017年2月：シドニー日本人学校】

日本人学級と、国際学級を併せ持つシドニー日本人学校は、日本とオーストラリアの二つの文化が自然な形で融合している学校でした。英語と日本語が飛び交いどのクラスで学ぶかも保護者が選択することができるそうです。日本人学級は、日本の教育課程で日本の教科書を使って授業が行われますが、国際学級は、オーストラリアのカリキュラムで現地の教科書などを使って授業を行います。国際学級の理科の教科書についてオーストラリア人の教師に尋ねたところ、教える内容に添った自作の教材を印刷したり、電子黒板に映したりしながら、授業を行うとのことでした。児童は教科書を持たず、ノートだけをもっていました。

【2017年2月：ケアンズ日本語補習校】

オーストラリアケアンズ日本語学校の校長先生とは「学校経営について」の対談を行いました。シドニー日本人学校と比較してもその経営は厳しい状況が伺えました。日本を出発する前から、校長先生とは何回もメールでやり取りをさせていただいていたので、お会いする前から意思疎通ができていました。自宅でも日本語指導を行っていらっしゃるということで、過密スケジュールの中、ご自宅まで案内していただき、教材や指導法などについても膝を交えて熱く語り合いました。

【2018年2月：シンガポール日本人学校（クレメンティ校）】

シンガポールの日本人学校は、2校の小学部と1校の中学部がシンガポール日本人会によって設立されていました。シンガポール教育法に基づき昭和41年12月にシンガポール教育省に登録された市立学校です。連携を保ちながら1つの事務局が、運営に携わっていて、事務局の本局はクレメンティ校にあり、他の2校には支局がありました。児童・生徒数推移に目を向けると、1996年が最も多く小学部2242名、中学部689名の計2931名であり、その後年々減少の傾向にあり、2005年には、小学部・中学部を合わせて、計1633名にまで減少したそうです。2016年は、小学部1753名、中学部482名の計2191名とまた、少しずつ増加の傾向が見られるという状況から、日本企業等のシンガポール進出状況も合わせて見えてくるようでした。

【2018年9月：オークランド日本語学校】

ここは、現地の学校に通っている子どもたちが、放課後に日本の教育を受けに来る補習校でした。掲示物に、「日本語だけで話をする」という言葉が書いてあったのが印象的でした。学校が始まる時刻も遅く、当然終了時刻も遅くなるため、必ず保護者が迎えに来なくてはなりません。児童が全員帰宅した後に、私は、訪問前から依頼されていた講演を行いました。「私の校長時代の学校経営とこれからの日本の教育」という演題で話をさせていただきました。先生方は、遅い時間でも残ってください、私の話に熱心に耳を傾けてくださいました。新学習指導要領の理念についての話の後に、日本から持参した授業映像も視聴していただきました。「主体的・対話的で深い学び」を追求する授業に大変興味をお持ちになり、研修の場の少ない先生方にとって有意義な時間だったと喜んでいただきました。後日、学校のホームページにも掲載したと伺ったので、帰国後、閲覧させていただきました。

【2020年1月：ラスベガス学園（日本語学校：アメリカ合衆国）】

ラスベガス学園はネバダ州で唯一の在外教育施設です。海外に在留する日本人の子どものための学校で、学校教育法に規定する学校です。しかし、学

校独自の校舎はなく、「THE DELTA ACADEMY」という学園の校舎を、放課後お借りして運営なさっていました。校長先生は、以前東京都の小学校で校長をなさっていた方でしたが、娘さんとこの地で暮らすことになり永住権を取得なさったとのことでした。私は、国語科が専門というお話をさせていただいたので、作文指導の授業も参観させていただきました。それは、個別指導を基本として、子どもから日本語を引き出し文章作成へとつないでいく授業で、根気よく丁寧に指導なさっている先生の姿が心に残りました。授業参観後には、広いホールに先生方が集まってくださり、短時間でしたが「日本の国語科教育が目指している身に付けさせたい力」などについて話をさせていただきました。先生方からもういくつか質問があり、楽しい交流の時間となりました。恥ずかしながら学園のホームページには、校長先生とのツーショット写真が掲載されていました。

この他にも、2018年3月には、ベトナム研修（異文化間相互理解実地研究）に参加させていただき、下記の日本人学校や現地の小中学校を視察させていただく機会に恵まれました。

- ・ハノイ日本人学校
- ・チェックギエム小中学校
- ・ロンアン省バンフー小学校

5. 日本語教育への関心

海外の日本人学校や日本語学校の視察を通して日本語教育へ関心を抱くようになり、本格的に勉強を始めることにしました。

2019年2月から専門学校に通い、436単位時間（文化庁指針420時間準拠）13科目の単位合格を得て、日本語教師の資格を取得しました。大学の勤務には影響しないよう、水曜日の夜と日曜日の午前・午後の3科目ずつの受講を継続しました。各科目の最後には試験があり、当然のことですが合格点に至らなくては、単位取得はできません。予想通り、「国語科教育」と「日本語教育」は、全く違っていたため、本腰を入れて一から学ぶ姿勢が求められました。日本語の特性や歴史・文字表記・対照言語学・語彙・意味・音声学・・・等、様々な角度から日本語について学ぶ楽しさを感じながらも、仕事の

合間の勉強はそれなりにエネルギーが必要でした。最後の科目は教育実習。日本語を学びたい外国の方々が来校され、生徒となり、受講生が授業を行うといったものでした。私の職業は伏せていたためか、授業が上手だと褒められて、気恥ずかしい思いをしました。学ぶ立場になったことで色々なことに改めて気づかされることがあり、その気づきを大学の授業に活かせるように努めなくてはと、教員の初心に戻ったような緊張感も覚えました。

6. 外国に繋がる子供たちへの支援

日本語教師の資格取得後、外国に繋がる子ども達の学習支援（NPO活動）を行ってきました。日本の国語科教科書の略式版を使って学習を進める児童もいましたが、私は学びの起点としての教材を見ながら、内容理解よりも、使用語彙を増やし、日本語での豊かな表現力を育んでいきたいと願いつつ指導を続けていました。

2020年度からは、川崎市教育委員会主催の「プレスクール」の講師をしてきました。小学校入学前の外国につながる子どもや保護者に向けて、学校の主な決まりや様子などを伝えたり、入学前の不安なことの相談に応じたりする活動です。「プレスクール」を受講なさった保護者や子ども達の笑顔に支えられて今年度も活動に参加しています。

7. おわりに

時代の変化に対応しながらも、成瀬仁蔵の教育姿勢・教育理念の基に歩んでこられた歴史ある日本女子大学。その一員として勤務させていただいたことを光栄に思います。特任教授としての仕事は、私の教職生活の集大成でもあったと思っています。

教職とは、人と向き合い、人の心を感じつつ人を育む、未来に繋がる夢のある仕事です。教員不足が聞こえてくる昨今ですが、教職の魅力を感じ、教員希望の学生が増えてくれることを願っています。

大学在職中、いろいろな方々に大変お世話になりました。この場を借りてお礼を申し上げます。これからも教育学科の益々の隆昌を心から祈念しております。